

報 會

日本脂質生化学研究会
(J C B L)

60年度会費払い込みのお願い

- 昭和58年度59年度の会費は、仙台の総会での席上3,000円に値上げが承認されたことを凍結して、2,000円のままで運営して来ました。いろいろ企業努力をして、59年度から60年度への繰り越し金も450,000円程あります。
- しかし、本文の方にもありますように、1988年にICBLが来日する可能性が高くなりました。そこで、60年度は、会費値上げの凍結を解除して、年会費を3,000円にさせていただきます。値上げの1,000円分はICBL開催準備金として積み立て、外国に対するサーキュラーの印刷と配布の費用に充当したいと思います。よろしくご理解ください。
- 昭和60年度会費3,000円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払込みください。

本年度の講演集の作成に必要ですので、明日にせず、今日お払い込みください。

- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口で備えつけの用紙をご利用ください。

会費送付先 振替番号 東京4-91400 日本脂質生化学研究会

- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金2,000円+昭和60年度会費3,000円=合計5,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或いは他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。

事務局(〒173)東京都板橋区加賀2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室

日本脂質生化学研究会事務局 TEL(03)964-1211

(内線)2320, 2321

.....貴方の会費で運営されています

今日、お払い込みください.....

第27回日本脂質生化学研究会研究集会のお知らせ

- 会 場 経団連会館（東京都千代田区大手町1-9-4）
- 期 日 1985年7月26日（金）～27日（土）
- 実行委員 内藤周幸（東京逓信病院 内科）
- 研究会参加費 3,000円を予定しています。
- 懇 親 会 は郵便貯金会館五反田ラポートでおこなう予定です。
懇親会費は5,000円を予定しています。

研究集会発表演題の募集

今年の研究集会は一般演題、シンポジウムとも口頭発表を原則といたします。ただ会期は2日間（2会場）ですので、申し込み演題数の多い場合にはポスター発表を考えて居ります。

① 演題の申し込み

1. 一般演題

口頭発表 発表15分、討論5分

2. シンポジウム（公募いたします。奮ってご参加ください）

発表20～25分、総合討論時間を設けます。

1 「レセプターとリポタンパク代謝」

2 「アポリポタンパクの構造と機能」

3. 発表時間は変更することがあります。

同一演者の複数の演題申し込みはご遠慮下さい。やむを得ず同一研究グループより複数の演題を申し込まれる場合には優先順位をつけて下さい。

申込締切 4月30日（火）

② 幹事会、実行委員会を中心にプログラム編成を行い予稿集用の原稿用紙をお送りいたします。

原稿締切 5月31日（金）

—— 期 日 厳 守 ——

申し込みおよび原稿送り先

〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部第1生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局

昭和60年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を昭和60年7月26日、懇親会に先だって、懇親会場に於いて開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 山川民夫

議題 1. 昭和59年度事業報告

1. 昭和59年度決算報告ならびに監査報告
1. 昭和60年度事業計画ならびに予算案
1. その他

以上

昭和60年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を昭和60年7月26日(金)正午(プログラム編成上、若干の変異があるかもしれませんが)より経団連内の会議室において開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

議題 1. 昭和60年度 日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討

- ## 1. その他

- 幹事の皆様には別途、ご案内を申し上げます。
- 尚、昼食代 1,000 円を申し受けます。

第27回 日本脂質生化学研究会講演申し込み用紙 (要領,事務局記入)

特別講演会のお知らせ

来る27回日本脂質生化学研究会に先だって、公開講演会を開催いたしたいと思
います。多数ご参加頂き、ご討論くださるようお願いいたします。

日 時 7月25日(木)午前11時より

会 場 経団連会館 東京都千代田区大手町1-9-4

会 費 無 料

演者および演題

1. James M. Felts, Professor of University of California,
California, Cardiovascular Research Institute, San Francisco,
U. S. A
[Nephrotic Hyperlipemia - the glycosaminoglycan connection]
(AM11.00~PM0.30)
2. Robert M. Bell, Professor of Biochemistry, Duke University
Medical Center, Department of Biochemistry, Durham, North
Carolina, U. S. A.
[Structure-Function Relationships of Protein Kinase C
Regulation by Diacylglycerols]
(PM1.30~3.00)
3. Bengt Borgström, Professor of University of Lund(Sweden),
Department of Physiological Chemistry.
[Luminal Digestion of Fats]
(PM3.00~4.30)
4. John M. Dietschy, Professor of medicine, University of Texas
Health Science Center at Dallas, U. S. A.
[The Regulation of Cholesterol Metabolism and Low Density
Lipoprotein Levels in Different Animal Species and in Man]
(PM4.30~6.00)

学術会議会員の選出について

学術会議関連の法改正に伴い、本研究会も研究団体としての諸手続きをして居りましたが、「生化学研究」を標榜した登録団体は表に示す6団体でした。

学術会議会員はこの登録団体を母体とする間接選挙で、表の如くなります。

選出母体となる 学 術 団 体	選出母体が 送り出す義務を有する 推薦人数	選出母体が 送り出すことのできる 候補者数	6 団体から選出 される学術会議 会員数
日本脂質生化学研究会	1	1	1
日 本 生 化 学 会	3	1	
日本過酸化脂質学会	1	1	
臨 床 化 学 会	1	1	
癌 学 会	1	1	
電 気 泳 動 学 会	1	1	
計 6 団 体	計 8 名		

本研究会としてなすべきことは以下の二点です。

- ① 2月28日迄に必ず1名の推薦人(間接選挙人)を出すこと。
- ② 2月28日迄に学術会議会員候補者を出す(出さなくてもよい)

—————。—————。—————。—————。—————。

以上の二点に関し、広く会員諸兄姉のご意見をいただき度々思います。ご意見をお持ちの方は、封書で事務局宛ご送付ください。

尚、幹事の皆様には別記様式で必ずご返事を賜り度々存じます。ご意見の内容によりましては幹事会の開催をいたしますが、容易に集約できる内容であれば、他の研究団体の動向を勘案して、山川会長の手許で決定をさせていただきます。

会 の 活 動 状 況

① 第26回日本脂質生化学研究会研究集会

7月14・15日の両日、夏休みに入って間もない新潟大学医学部の講堂を会場にして開催された。両日とも雨もようで降ったり止んだりであった。研究集会には、心が浮き立つような晴天より、雨の方が会場に腰が落ち着くというものである。

前回25回の研究集会が122題の演題を集めて研究会史上最多を記録したが、それをあっさり上まわって、第26回は131演題ということになった。1演題15分で、2日目は朝から3会場ということで、その演題数を収容した。会場数、発表時間のことは、前回の会報でも論じたのでくどくなるが、幹事会で作った目安〔1演題20分、80演題2会場2日〕が実行されることなく、実勢に合せて毎年運営されているのが実情である。この辺で、プログラム編成会議(在京幹事)の研究会自体の中での位置づけも明確にしなければならないようにも思うし、また在京幹事会というものの、規約の中にない存在であるので、これもきちんと位置づけをしなければならないものと思う。

以上のように基だ演題数の多い研究集会になったが、小野・矢野両実行委員のご努力によって、発表会場の運営はスムーズにおこなわれ、それぞれ成果があったように思われる。しかし、いつものことながら、実行委員あるいはその研究室の方々は、研究発表を落ちついて聞くことができず、ただ風台風が通り過ぎてゆくのを待っているような状態になってしまうのは甚だお気の毒である。運営にたずさわられた皆様に心からお礼を申し上げる。

第一日目の夕刻には、新潟市の中心部にあるホテルイタリア軒で懇談会が開催された。多勢の会員の方が参加されて一夕を過ごした。毎度のことであるが、参加者数未定のままで準備をする気苦労は、懇談会担当者にとっては相当なものである。そろそろ、懇談会抜きの研究集会を考える時期かとも思うが、会場数が多くなると、会場で見掛けなかった人と旧交を暖めたり、時間が制限されて十分に聞けなかった質問のつづきをしたりする場として必要なのかもしれない。

尚、7月13日夕刻には、小野・矢野両実行委員主催の、既に今日まで恒例化してしまっただ前夜祭 — 公開講演会が開催され、プリティシュコロンビア大のVance

教授、カリフォルニア大の Fulco 教授が話をされた。これも予想を上まわる聴衆が集まり実りの多い一夜であった。

② 第 26 回日本脂質生化学研究会総会

昭和 59 年 7 月 15 日午後 6 時、ホテルイタリア軒の懇親会場で、懇親会開催に先だっておこなわれた。

総会の次第および議事内容は次の如くである。

イ. 挨拶

原 会長

ロ. 昭和 58 年度事業報告および決算の承認を求める件

植田幹事

59 年 2 月発行された会報に記載された 58 年度事業報告について承認を求め拍手をもって承認された。引きつづき、同会報に記載された 58 年度決算報告、および舟橋監事の監査報告（原会長代読）について承認を求め、拍手をもって承認された。

ハ. 昭和 59 年度事業計画および予算の承認を求める件

植田幹事

59 年 2 月に発行された会報に記載された 59 年度の事業計画について承認を求め、拍手をもって承認された。予算案については、58 年度と同様、年会費 3,000 円へ値上げの凍結をおこない、2,000 円のままで運営することが承認された。

ニ. 会長・庶務幹事・会計監査の任期満了に伴う改選の件

植田幹事

任期満了（59 年 12 月 31 日）に先だって原会長より、次期の会長を辞退したい旨の申し出を幹事会で協議した結果、原会長の意向を了承、次期（昭和 60 年 1 月 1 日より 2 年間）会長として山川民夫氏を推し、原現会長を名誉会長に推戴することになった経過を報告、承認を求めた。その結果、拍手多数で承認された。

庶務幹事については、植田庶務幹事の留任、かねて辞意を表明して居られた舟橋会計監査は、野島庄七氏に交替することが同様の手続きで承認された。

原会長・山川民夫氏より、それぞれ挨拶があった。

ホ. 新幹事委嘱の件

原 会長

菅野道廣、秦 霞哉、三成 脩の三氏に新たに幹事をお引き受け願うことが

提案され、承認された。上記 3 氏の同意が得られれば 60 年 1 月 1 日より 4 年間幹事をお引き受け頂くことになる。

尚、59 年 12 月 31 日付で任期満了となる幹事（42 名）については、60 年度会長名で依頼状を出し、同意を得た上で再任を願うこととした。

ヘ. 第 27 回研究集会実行委員委嘱の件

原 会長

東京通信病院 内藤周幸内科部長にお願いしたい旨提案され、満場一致で承認され、同氏よりご挨拶があった。

以上で総会の議事は無事終了し閉会宣言され、直ちに懇親会に移った。

例年、総会は第二日目の昼食時間に当る時間に行っていたが、出席者が寥々たる有様であった。総会を運営する当事者にとっては淋しい限りであったが、総会に人が集まらないのは“会の運営は概時、良好”の意味と自ら慰めていた次第である。しかし、“出席者のいない総会は無意味だから、人の集まる懇親会で総会をやったら”という某氏のご提案があり、“それでは懇親会に出席しない人は総会に出られないというのでは困る”“懇親会の冒頭に総会を開催し、懇親会に出席しない人はそれで帰って頂くということではないか”というやりとりの末、59 年度の実験になった次第である。ご馳走を目の前にして、議事の進行も慌てざるを得ないし、出席者にも、“早く終れ”という顔がありありと見えないわけではないが、とにかく、多勢の会員に総会議事を開いて頂くことができた。今後どうしたらよいか、ご意見をいただきたい。

③ 59 年度幹事会

59 年 7 月 14 日 12 時 20 分より新潟大学医学部研究棟 2 階大会議室において開催され、総会に提出する 58 年度事業、決算報告、59 年度事業計画、予算案の審議をおこなった。

また役員改選につき原会長の次期会長辞退の申し出の取り扱いを協議し、舟橋会計監査の次期辞退の表明もあり、山川民夫都臨床研所長が短期間ならという条件つきで、会長を引き受けられ、山川民夫会長・野島庄七会計監査・植田伸夫庶務幹事の体制で 60 年度を運営することを決した。

また、日本学術会議関係の法改正に伴い、日本脂質生化学研究会も学術会議会員

および同推選人を出すことのできる学術団体として登録手続きを進めている経過について報告があり了承された。

ICBLのCorresponding memberを長らく勤められた沼教授より、仕事の内容が変わったので、然るべき人と交替したいという申し出があり、本会としては永井克孝教授をICBLに推選することを決めた。尚、ICBLより1988年のICBL東京開催を打診して来ているので、更に接触して、真意を確かめることにした。

60年度、研究集会の実行委員を正式に内藤周幸氏にお願いすることにした。

④ 59年度在京幹事会

59年12月11日午後7時より、湯島ガーデンパレスで開催された。

出席者

赤沼、赤松、荒木、安藤、石塚、遠藤、植田、大橋、金子、川口、児島、鈴木、脊山、内藤、永井、野島、野間、原、原島、飯田、舟橋、山川、山田、和久の各幹事、島崎(事務局)

議題 ① 59年度事業報告および決算案

② 59年度事業計画および予算案

③ ICBLの問題

④ 学術会議の問題

⑤ 60年度研究集会準備状況

①②については別掲(9頁)の如き内容で60年度の幹事会および総会の承認を求めることにした。

③については永井克孝ICBL-Corresponding memberより別掲の如き報告があり、1988年に日本で開催される可能性が大であることが紹介された。

④に関する事項はその後の経緯も含めて別掲(2頁)を参照願いたい。

⑤については内藤周幸氏より経団連会館で2会場2日間おこなう旨説明があった。前夜祭には外国人研究者3名の講演が予定されている。

尚、在京幹事会後同所において、原・舟橋両先生の、日本脂質生化学研究会創立以来のご尽力をお労いする意味を込めて、出席者全員の拠金によってささやかなパーティーを開き、両先生に記念品を贈呈した。

⑤ 59年度事業報告(59年1月1日～59年12月31日)

○ 会 員 正 会 員 803名(58年790名, 57年758名)

59年度新入会 47名

退 会 34名

名誉会員 6名

賛助会員 23社(24口)

○ 役 員 会 長 原 一 郎 任期59年12月31日迄

庶務幹事 植田伸夫 ”

会計監査 舟橋三郎 ”

幹 事 略

○ 第26回研究集会の開催

59年7月14日(土) 新潟大学医学部

15日(日)

実行委員 小野輝夫教授

矢野郁也教授

参加人員 360名(58年364名札幌 57年392名仙台)

提出演題 一般演題 118題(内誌上发表3)

シンポジウム 11題

計 129題

(58年122題 57年96題)

○ 59年度会報の発行

59年2月1日 28頁

○ 脂質生化学研究26巻の発行

59年6月30日 本文541頁 目次等19頁 広告24頁

⑥ 60年度事業計画(60年1月1日～60年12月31日)

○ 会 員 正 会 員

名誉会員 木村、永井、山添、舟橋、数野、山崎、原(名誉会長)

○ 役 員 会 長 山川民夫 61年12月31日迄

庶務幹事 植田伸夫 ”

会計監査 野島庄七 ”

幹 事

(任期60年12月31日迄)

猪飼 篤, 石塚稲夫, 鬼頭 誠, 小峰仙一, 矢野郁也,
山本尚三

(任期61年12月31日迄)

木村修一

(任期62年12月31日迄)

秋野豊明, 荒木英爾, 安藤 進, 板坂 修, 大橋昌子,
奥田拓道, 川口昭彦, 鈴木明身, 玉井洋一, 中野益男,
西村顕治, 野間昭夫, 水柿道直, 和久敬蔵

(任期63年12月31日迄)

菅野道広, 秦 葭哉, 三成 脩(以上新任)

赤松 誠, 今井 陽, 植田伸夫, 小倉道雄, 香月裕彦,
金子 弘, 金田尚志, 日下喬史, 楠瀬正道, 児島英也,
斎藤国彦, 坂上利夫, 武内 望, 武富 保, 千田信和,
内藤周幸, 永井克孝, 野島庄七, 野田万次郎, 橋本隆,
林 陽, 林 浩平, 原 一郎, 原島圭二, 飯田静夫,
平山 修, 藤野安彦, 穂下剛彦, 堀 太郎, 牧田 章,
松本 亮, 村松敏夫, 山川民夫, 山下 哲, 山田晃弘,
山本 章, 蔽内百治

。 会 費

正会員年会費 3,000円(旧 2,000円)

正会員入会金 2,000円(旧 1,000円)

賛助会員年会費 20,000円(旧 10,000円)

。 会報の発行

。 脂質生化学研究28巻の発行

。 昭和60年度研究集会の開催

実行委員長 内藤周幸氏

。 創立25年記念事業

。 その他

⑦ 59年度決算および60年度予算

収 入 の 部 項 目	59 年 度		60 年 度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	1,400,000	1,418,000	1,950,000
入 会 金	30,000	47,000	40,000
賛 助 会 員 会 費	270,000	210,000	400,000
講 演 集 売 上 げ	75,000	88,000	100,000
広 告 収 入	750,000	760,000	760,000
利 子	3,000	7,770	8,000
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	2,783	0
小 計	2,528,000	2,533,553	3,258,000
前年度よりの繰越金	759,901	759,901	452,840
計	3,287,901	3,293,454	3,708,000

支 出 の 部 項 目	59 年 度		60 年 度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	300,000	300,000	300,000
会 報 製 作 費	180,000	162,000	180,000
講 演 集 製 作 費	1,500,000	1,358,100	1,500,000
旅 費	50,000	40,000	30,000
郵送料・通信費	500,000	505,490	550,000
事 務 用 品 費	10,000	6,300	10,000
会 合 費	150,000	132,404	150,000
謝 金	60,000	70,000	60,000
総 会 経 費	10,000	5,300	10,000
事 務 経 費	100,000	100,000	100,000
雑 費	10,000	161,020	10,000
I C B L 準備積立金	0	0	358,000
小 計	2,870,000	2,840,614	3,258,000
次年度への繰越金	417,901	452,840	450,000
計	3,287,901	3,293,454	3,708,000

会長就任に際して

山 川 民 夫

この度、本会の創立以来の最大の功労者である原一郎先生が会長の辞任を申し出られました。先生は昔と変わらず若々しく活動的な方で、おやめになる必要はないと思うのですが後進に道をゆずるといわれるので、名誉会長として会の象徴でありつづけていただくことになりました。私は旧制二高で原先生の二年後輩に当りまして、いつも「オイ 山川」と呼びついで命令されておりますので、その任ではありませんがしばらくお引き受けすることになりました。何卒よろしく願いいたします。同時に創立以来の功労者である舟橋三郎先生も会計監査を退任されると申し出られましたので、野島庄七先生に後任をお願いいたしました。両先生の長い間の御苦勞に深く感謝申し上げます。

私どもは、何人かの同志とともに本会を創り、愛情をもって会を育てて参りましたが、会の主役はあくまで研究会で立派な発表をなさる方々であり、その邪魔にならないように傍役に徹して参ります。

私の関係しているいろいろな学会の中で本会が一番親しみ易く、暖かな雰囲気です。しかも何でも言えて、後にしこりを残さない研究会だと思います。

常連というものは、たまに顔を出す素人衆からはとかく排他的に見られ勝ちといわれますが、本会の常連は、いつもよそからの情報もよくとり入れ、新しい仲間を増やして行きたいと思います。

幹事の方々の御意見を尊重して、何でも話し合いによってよい方向に舵を取らせていただきたいと存念しております。

会長を辞任するに当って

原 一 郎

1977年の会報に就任の辞をかき、85年に辞任のことばを述べる事になりました。

先づ何をおいても、会員、役員の皆様方の御協力によって会の運営が誠にスムーズにしかも目覚ましい発展を遂げておりますことを深く感謝します。

今日は北の湖が引退した日でしたが、彼は質問にこたえて“ホットした”と申ししていました。私も2年前に医科歯科大学を退任した時、本当に“ホットした”というのが実感で、全然淋しさはありませんでしたが、今回は“役目は終ったな”という一種のセンチメンタルな気分もして、“山川先生よろしく”と云った所です。

最初この会を始めた時は、このような立派な、そして権威のある(若い連中は発表するのが一寸恐ろしいと云っている)会になろうなどとは、全く考えてもませんでした。しかし1964年が375人、1977年私が会長になりました年が533名、1984年が790名、小さな雪庇から雪が転がり落ちて、大きな球になって堂々と走っている感じがしております。

1967年に国際生化学会の折にこれにおぶさる形で国際集会を開いた時の事も大きな思い出です。来会の方々にビールしか飲ませなくてワインの壺を横目でにらんでおられた向きもあり、もう少し余裕があったらなと考えたこともありました。

これからは会員の方々の素晴らしい発表を仔細に伺うことと、懇親会には必ず出ること、これが今の私にとって重要な仕事ですので、つづけて出席いたすつもりです。尤も、私の良き友と居寝りの競走をすることもあるかも知れませんが。

どうも有難うございました。

1985-1-15 記

「原先生、ごくろうさまでした」

東京医科歯科大学教養部化学教室 岡 崎 三 代

「オイ、俺の役目は終わったよ。」

原会長の退任と山川会長の就任という形はとりながら、日本脂質生化学研究会を肌で体験しておられる会員は何かほのぼのしたものを感じるでしょう。原一郎先生の研究室で一緒に行動し、良き相談相手でおられる山川先生を知る機会に恵まれた私は、一番大切なものはチームワークだと感じました。格式張った学会と違い、規模は小さいけれど「脂質生化学」の面での掘り下げた議論をと、同志の集まりとして24年前に発足した研究会を今日まで支えてきたものは、原、山川両先生を中心とした幹事の諸先生方のご努力に他なりません。脂質生化学分野の拡がりや研究者の増加につれ学会形式に近づかざるを得ず、本会設立の主旨を本質的に離れつつある空間をとり戻すための円卓形式のシンポジウムやポスターセッションなどの試みも暖かさを感じさせます。

先生は、昭和51年に第2代会長に就任されました。それは養賢堂の2階の発足当初から庶務幹事として自ら宛名書き（届いたかどうか？）、郵便局への会報や要旨集の運搬、会計など事務局のご苦勞を長年体験された上でのことで、細かい配慮が行き届いていたわけです。そんな点から、東京医科歯科大学退官とともに会長退任を示唆された先生の意志をもう2年踏みとどめさせたのかも知れません。

退官後、仕事の関係で会う度に、開口一番、スケジュール表を示しながら、

「俺は頑張るぞ、こんなに忙しいんだ。でも年だな。来週の京都の学会はやめようかな。」私は思わず用意しておいた言葉を飲みこんでしまいました。

教育者、研究者として大学人であった先生は、退官後敢えて「会社の顧問」という地位を選ばれました。技術士の免許をもつ先生の初期の目標にぶつかる姿は、

後進の者にとって心強く感じます。原会長から、会報や要旨集の入った切手の貼ってない封筒を手渡された会員の方々も多々おられると思いますが、そんな切換え時期の困難さをご自分の足で、体で踏みこえようとする先生の姿に頭が下がる思いです。

「次の目標は？」

「一盗二婢三妾四……さ。」と。

これは夢を追いつける万年青年、原先生の口癖であって、こんなことを言いながら次の仕事の構想を練っておられるのです。

新幹線の中で岩波新書の「法王庁」を読まれている先生に、「なかなかそういう本を読む余裕をもてませんね。でもいつか……。」

「俺は、若い頃 小説を乱読しているんだよ。それを実践したことはないけどね。ところでレスビアンの語源を知っているのかい？」

67才にして夢に燃えている原先生、ますますお元気で次の目標に突進して下さい。

「本当に、ごくろうさまでした。」

日本脂質生化学研究会創立 25 周年のこと

日本脂質生化学研究会は 1960 年の 10 月 31 日に創立されました。下図が、その時のサーキュラーで、現原名誉会長の手書きです。

脂質生化学者、集い

今夏 7 月 20~23 日 マルセ-ユにおいて 5th International Conference on Biochemical Problems of Lipids が開催され日本から安田守雄教授(北大医・生化)が出席されまして下記に於いて会談の模様を伺うことになりました。猶ほこれを我々 脂質生化学者の交流の場を作りたいと思っておりますので併せて当日おぼろしいと思ひます。多数の参加を期待いたします

- 時 昭和 35 年 10 月 31 日 18:00
- 所 向上会館 (養賢堂 2 階)
東大正門前郵便局横 文部省ビル 70. 921-0659
- 会費 不要
- 連絡先 東大医学部薬化学科 井橋三郎 東大内統 4169
東大医学部血清学教室 原 一郎 3456

そこで安田守雄氏が会長に選出され、翌昭和 36 年に第 1 回、第 2 回の研究集会が開催され、(15 頁)その研究論文が「脂質生化学研究 1962」にまとめられて発行されたのが逆算すれば、「脂質生化学研究第 1, 2 巻合本」ということになります。

第 3 回は 1962 年(昭和 37 年)6 月 16 日と第 4 回は 1 月 2 日に開催され、それぞれ簡単な予稿集が作られ、その内容が Proceeding として「脂質生化学研究 1963」としてまとめられています。これが、第 3, 4 巻合本ということになります。

1963 年になると、今まで年 2 回研究集会を開催していたのを年 1 回にすることにし、今日の講演集に相当する — 今日の講演集は果して Abstract か Proceedings か、議論があると思いますが — ものが作られ、それを持って講演を聞くという形式になりました。これは「第 5 回脂質生化学研究会講演抄録集」と名付けられているもので、これを「脂質生化学研究」の第 5 巻に相当するものと考えています。

1964 年は、「脂質生化学研究 1964」を出しています。これが第 6 巻に相当するもので、それ以後、巻数を数えて、今年 1985 年が 27 巻ということになります。

まあ、Proceedings の巻数と創立以来の年数に違いがあるのは以上のような理由ですが、いずれにせよ今年が創立 25 年になります。

脂質生化学研究会第 1 回研究集会

日 時 昭和 36 年 11 月 7 日 (土)
10:00 — 16:00
ところ 日本生化学会第 4 階講堂
東京・千代田区神田四谷 明治大学大学院
(西側「かまの氷」地下車)

テーマ “脂質のフロマトグラフィ”

1. 脂質のペーパーフロマトグラフィ 長谷川大 野田 芳太郎
2. レゾナル・フロマトグラフィによる分析 石 沢 全
石 大 康 寺 原 典 雄
3. PM を用いるリン脂質の分析 長谷川大 丸 尾 大 治
4. 脂質の分析 会 員 安 田 守 雄
5. 赤外線吸収、吸光度を基にした脂質分析への応用 長谷川大 丸 尾 大 治
6. 脂質のガスフロマトグラフィ 長谷川大 丸 尾 大 治

会費 会費、その他
会費、第 2 回研究集会開催の際、会費の徴収紙を以て。

日本脂質生化学研究会第 2 回研究集会開催のお知らせ

下記により、第 2 回研究集会を開催いたしますので御出席願います。
多岐の出席を要して居るため御出席を願います。
日 時 昭和 36 年 11 月 7 日 10:00—16:00
場 所 東京府品川区品川 4-5-3 Tel 202-1141
(地下鉄品川駅下車)

議題内容

- 1) 長谷川大 丸 尾 大 治
- 2) 石 沢 全 寺 原 典 雄
- 3) 長谷川大 丸 尾 大 治
- 4) 石 沢 全 寺 原 典 雄
- 5) 石 沢 全 寺 原 典 雄
- 6) 石 沢 全 寺 原 典 雄

なお、研究集会の日、日本脂質生化学研究会第 2 回研究集会も開催いたします。

参加費

- 1) 参加費
- 2) 会費
- 3) その他

昭和 36 年 10 月 15 日
日本脂質生化学研究会 事務局

東大・医・栄養 脊山洋右

国際脂質生化学会 (ICBL) は1953年にベルギーのブリュッセルで開かれたのが始まりで、その後毎年のようにヨーロッパ各地を転々として引き継がれてきた。昨年9月には25周年記念ということで第25回大会がベルギーのアントワープで開催された。

日本脂質生化学研究会 (JCBL) も今年で25周年ということであるから歴史的にも、又名称の点でも両者は似ているが、会の運営の面で大きな違いがあるように思われる。JCBLが毎年、脂質生化学全般を対象とし研究会を行うのに対し、ICBLはむしろ年毎にテーマを変えて演題を絞っているのが特徴といえよう。

因みに昨年の第25回大会のテーマは

I Lipids and receptor mediated processes

II Lipid carrier proteins

III Glycolipids

であったのに対し、今年の第26回大会 (オーストリア、グラーツ) では

I Intracellular lipid transport and membrane assembly

II Ether lipids: physiological relevance and membrane properties

III Interaction of serum lipoproteins with cell membranes and receptors

がトピックスとして取りあげられている。

ICBLはこのように毎年テーマが変わる関係で、参加者の顔ぶれも流動的で、いわゆる常連は十人前後と思われる。このことは幹事会 Steering committee についても言えることで、会長のGartonと事務局長のGalliを始め二十人位の幹事のうち出席者は通常半数であり、しかもその顔ぶれが毎回変わるのが実情である。

さて、第24回大会が行われたフランスのツールーズの幹事会で日本で開く可能性が打診された。この幹事会には日本側から誰も出席していなかったが、1987年か1988年の開催が討論されている。

日本脂質生化学研究会としてはこの際の議事録に基くGarton会長からの打診に対して昨年4月5日に有志懇親会を開き、次の3点を確認した。

- 1) 日本側の連絡委員を沼正作教授から永井克孝教授に変更する。
- 2) 1988年にICBLとJCBLの joint meeting を企画する。
- 3) 同時期に開催される、より大きな国際会議をさがして、その satellite meeting としての可能性を検討する。

この方針は昨年9月5日にアントワープで開かれた幹事会で永井委員より報告された。この幹事会の席上では第2項目の joint という用語が問題となり、ICBLはJCBLという混合或いは共催の形式をとることは容認できないこと、あくまでICBLとして独立の開催形式をとるものでなければならないことが強く要望された。ただし、この要望をふまえての日本側からの1988年の招請が望まれていることが確認された。なお、1986年は英、バーミンガムで、1987年はノルウェーでの開催予定までのスケジュールが、Garton会長より口頭で披露された。

12月11日に開かれた在京幹事会でこの間の事情が報告され、先に記した3項目が承認され、今後1988年のICBLを招請の方向で検討していくことになった。この際JCBLとの joint という意味はJCBLの例会 (日本語) を2日行い、続いてICBL (英語) を2~3日開くという形式であることが説明された。

1988年に開かれる大規模な国際集会については情報収集を行い、本年9月の第26回ICBLまでには何らかの方針を打ち出すことにした。尚、第26回ICBLには連絡委員である永井教授が出席されないの、脊山が代理として Steering committee に出席して日本側の計画を報告することとなった。

以上がICBLの日本での開催に関する議論の経過報告であるが、本年8月位までには方針を確定する必要があるの、御意見をお持ちの方は事務局あてに御連絡下さい。

第25回国際脂質生化学印象記

帝京大・医・第2生化学 石塚 稲夫

昨年の会報に詳しいプログラムが掲載されていたので、ご存じの方も多いことと思いますが、第25回のICBLはAntwerp大学において開催された。今回の topic は Lipid-mediated Process, Lipid Carrier Proteins および Glycolipid であり私も出席したので御指名により、急ぎ簡単な印象記を書きます。

私はかつて西独 Marburg 大学医学部の Wiegands 教授のもとで研究中に1969年アテネでの第13回ICBL大会(C. J. Miras 教授主催、トピックは Structure and Metabolism of Glycolipid)に出席する機会があったので、対比させてみるのも面白いと思いその時の思い出から書き始めたい。会場となったホテルのあるアテネ郊外のエーゲ海岸は陽ざしがまぶしく、南国情緒にあふれ、ドイツから国際特急アクロポリスの座席で Wiegandt 教授と一緒の38時間の旅の疲れもたちまち吹き飛んでしまった。講演者としては、R. M. Burton, J. Folch, G. Dawson, C. C. Sweeley, E. Klenk, S. Roseman, H. Jatzkewitz, K. Puro, G. Tettamanti, A. A. Benson, J. F. G. M. Wintermans などの名前が記憶に残っている。

ヨーロッパ中心のこの学会の性格のためか、この年に日本の対外収支がようやく黒字に転じたばかりという経済情勢を反映してか、日本人の出席者は私ひとりであったのは少し寂しかったが、Yamakawa の名前と仕事が大変高く評価されていることに力を得て楽しく聴くことができた。

84年9月初めも Wiegandt 教授の VW Golf に同乗させていただいてドイツを発ち、完備したアウトバーンを快速で飛ばし美しいベルギーの酪農地帯を抜けてアントワープ市に到着した。この町は15世紀に港として栄え、ネロ少年と犬の物語りで有名なカテドラルがあるので最近では日本の若い人たちが沢山訪れるという。私は多忙のため Rubens の作品はとうとう一つも見ることができなかったが、アフリカに植民地をもっていた時代を反映している動物園を楽しむことができた。ベルギーはフランスの隣なのでグルメ的にも洗練されており、北海の海の幸が豊富でム

ール貝やザリガニのスープは特に安くておいしい。学会の参加者は226人で、国別ではフランス(41人)、西独(29人)、ベルギー(26人)からが最も多く日本からは10人であった。ヨーロッパの学会らしくあまり宣伝もせず、進行も至ってあっさりで行なっていた。講演は理学部の講堂で行なわれ、一会場で一日に一つずつのシンポジウムと関連するポスターが割り当てられたが、一人当たりの講演時間45分が十分であったのに対して数の多いポスターをじっくり見る時間が足りなかったのが残念でならない。なんと言っても最近生物活性がはっきりしてきた PAF、ジアシルグリセロール、ホスファチジルイノシトールに関する演題が圧倒的に多く、E. P. Kennedy の開会式講演もこれらについて総説していた。各種脂質結合蛋白質に関する進歩にも目をみはらせるものがあった。糖脂質にも FAB や SIMS などの新しい質量分析法や遺伝学的方法の導入によって、15年前には想像もできなかったような画期的な進歩がもたらされており、機能についてもこれからの進展が期待された。

「コーヒー豆を最初にローストしたのは山火事である」

植田 伸夫, 望月 澄子,
小杉 弘子, 西谷 郁子

テレビの画面にコーヒーの赤い果実と炎が重なって写し出されているコマーシャルが出ている。

コーヒー豆は、分類の本を見ると

緑色植物門

維管束植物亜門

被子植物類 綱

双子葉類 亜綱

子房花類 下綱

アカネ目

アカネ科 (Rubiaceae)

の *coffea* の木の果実のタネである。要するに、コーヒーの木は普通に我々が木といっている概念に含まれるもので、近縁の仲間には、アカネやクチナシ、キナがある。アラビカ種 (*C. arabica*)、リベリカ種 (*C. liberica*)、ロブスタ種 (*C. robusta*) の三種があり、リベリカ種は 10 ~ 15m の高木になるという。最近、時々花屋さんの店頭で赤い実をつけた鉢植を見かけるが、多分アラビカ種であろう。

実には果肉があり、その中に二ヶの種子がある。これがいわゆるコーヒー豆で、豆科の植物とは全く関係ない。生のコーヒーは青く、噛んでみると青臭い匂いで、コーヒーの香りの片鱗もない。

「四訂日本食品成分表」を見ると表のような数値が出ている。

	水分	タンパク質	脂質	炭水化合物 糖質 繊維		灰分
いり豆	2.2	12.6	16.0	46.7	9.0	4.2
浸出液	99.5	0.2	0.1	0		0.1
インスタント	3.8	20.0	0.3	61.9	0	8.2

カフェイン	タンニン
1.3 %	8.0 %
0.04 %	0.06 %
0.8 %	5.0 %

この分析値は、浸出液とインスタント（浸出液を凍結乾燥したものと思う）の間に大きな違いがあっても俄には信じ難いが、いり豆には総重量の 16 % もの脂質が含まれていて、コーンオイルをとるトウモロコシ（6 % 程度）よりはるかに多い。

ところで、コーヒーをいれるというのは、焙煎したコーヒー豆を粉碎し、熱水で抽出する（水抽出もある）のが一般的である。この熱水抽出で、どの程度の脂質が抽出できるのかを見てみた。即ち 15 g のモカミックスをフィルター（メリタ）を用い、250 ml の熱水で形の如く抽出し、コーヒーを得て、そちらは飲んでしまい、抽出残渣を調べてみた。そうすると、モカミックスの脂質含量は 10.4 %、それからコーヒーを抽出した残渣の脂質含量は 1.03 % で同じであった。しかし、熱水抽出残渣は抽出前に比べてその重量が約 21 % 減少して居り、その熱水抽出物 21 % のうちの 2 % 強が脂質ということになる。

この熱水抽出が、特定の脂質のみを抽出するか否か、コーヒー豆末とコーヒー抽出残渣の脂質パターンを TLC で比較してみると両者に全く差はなく、TG が圧倒的に多く、ステロール、ステロールエステル、遊離脂肪酸、カロテノイド（あるいは炭化水素）が検出され、リン脂質はほとんどなく、MGDG、DGDG と思われるものが極く少量検出されている。

焙煎というのは実際に温度が何度になるか知らないが、相当に油がいたむだろうと思ったことがある。そこで焙煎前の青豆と焙煎した豆の脂肪酸パターンを比較したら全く同じで、脂質の収量も変らなかった。そしてインスタントコーヒーの脂肪酸パターンまで美事に同じであった。

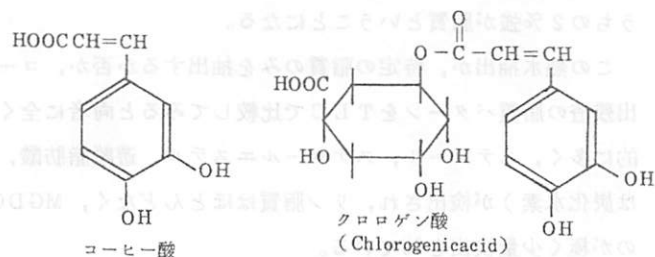
	14:0	16:0	18:0	18:1	18:2	18:3	20:0
インスタント (ネスカフェ エキストラ)	0.4	33.2	7.6	10.2	43.1	1.4	2.9
モカミックス 焙煎粉末	1	36.4	7.0	8.0	43.5	1.7	2.6

コーヒーの脂肪酸の特徴はパルミチン酸とリノール酸が圧倒的に多いのであるが、焙煎という熱処理に弱いものではないらしい。因みにインスタントコーヒー、本物のコーヒーにTBA反応物質があるかどうか調べてみたが、普通に飲む濃度では褐色が強く測定がうまくできないが、少くも530nmには特異的な吸収は認められなかった。

コーヒーといえばカフェインが付きものである。カフェインは熱水には易溶であるが、冷水には比較的溶けにくい。カフェインを好まない方は低温で抽出したコ

1gのカフェインを溶かすに要する水量	
冷水	46ml
80℃温水	5.5ml
沸騰水	1.5ml

ーヒーを温めて飲めばよいのであろう。カフェインの薬理効果については周知のことであるが、生化学的に興味を持たれるのは、コーヒー酸(Caffeicacid)であろう。



コーヒー豆中ではキナ酸(quinicacid)とエステル結合したクロロゲン酸として存在し熱水に溶ける。コーヒー酸にはペルオキシダーゼや、インドール酢酸酸化酵素の阻害活性が認められているし、植物生長の阻害因子ともいわれている。焙煎した状態でどうなっているかわからないが、飲むコーヒーの中にも多分は入っていることであろう。

分類のところへ戻ると、近縁にクチナシがある。そこで手許にあったクチナシの実をほぐしてみた。ことによったらコーヒー豆に似た豆が二ヶ出て来て、それをローストして粉にして熱水で抽出すると黄色い(ご存知のようにクチナシの実は美し

い黄色の色素の原料)コーヒーができるのではないかと……ところがクチナシの実から出てきた種はたくさんの小さい赤い鱗片状のもの……丁度よく熟したピーマンの種のような形……であった。



平凡社「世界大百科事典」より

編集後記

今年は、きちんと準備をして、心残りのない会報を作ろうと思ったのですが、やはりパタパタ、約2週間で作り上げることになりました。

去年は、東京のめずらしい大雪の中の製作でしたが、今年はカラカラ天気、それでも2、3日前に一寸お湿りがあって、ひきっぱなしの風邪も何とかおさまりそうです。

皆様も、くれぐれも風邪をお召しになりませんように。!

(事務局 記)

本誌に併せて近畿日本ツーリストの案内書を入れました。今年のICBLの日程等は案内書をご覧ください。

会報の郵送料の一部を近畿日本ツーリストに負担してもらいました。

賛 助 会 員 (5 0 音 順)

エーザイ株式会社
株式会社大阪細菌研究所
株式会社大塚製薬
小野薬品工業株式会社
共立出版株式会社
三共株式会社
塩野義製薬株式会社
株式会社資生堂
住友化学工業株式会社
第一製薬株式会社
大日本製薬株式会社
株式会社東京化学同人
東京田辺製薬株式会社
株式会社東京プリント印刷
東洋曹達工業株式会社
富山化学工業株式会社
株式会社中山書店
日本凍結乾燥株式会社
日本ルセル株式会社
藤沢薬品工業株式会社
株式会社ヤクルト本社
山之内製薬株式会社
雪印乳業株式会社

以上 23 社